

民衆の暮らし

奈良時代の民衆の生活、特に農民の生活は、当時の和歌や住居跡から辛うじて推測できる程度である。ところが厄介なことに、実態を捉えにくい農民の動きは、後の土地問題に大きく関わってくる。①税負担が嫌で浮浪・逃亡した農民がその後になくなったか②初期荘園とは何か、以上2点は確実に理解したい。

○住居と税負担

●憶良の和歌①

(1) _____ による「(2) _____」(『(3) _____』収録)は、
役人が貧しい農民に生活を問い、農民が答える場面を詠む。
⇒脚色もあるが、奈良時代の農民の生活を知ることができる。



図1 山上憶良

あめつち 天地は 広しといへど 吾が為は 狭くやなりぬる [中略] ④ 伏廬の 曲廬の内に 直土に 藁解き敷きて
[中略] かまど 竈には 火気吹き立てず 甑には 蜘蛛の巣かきて 飯炊く ことも忘れて [中略]
⑤ 楚 取る 里長が声は 寝やどまで 来立ち呼ばひぬ かくばかり 術無きものか 世間の道
⑥ 世間を 憂しとやさしと 思へども 飛び立ちかねつ 鳥にしあらねば

【現代語訳】

天地は広いと言うが、私にとっては狭くなってしまったのか。[中略] ④低くつぶれ、曲がって傾いた家の中に、地べたにじかに藁を敷いて [中略] カマドには火の気がなく、飯炊き用の土器には蜘蛛の巣がはって、飯を炊くことも忘れたふうで [中略] ⑤鞭をもった里長の呼ぶ声が、家の中にまで聞こえてくる。世の中を生きていくことはなぜこれほど難しいのか。⑥世の中を辛く痩せるように耐えがたく思うが、鳥ではないから飛んでいくこともできない。

<住居の変化>

下線部④のように、貧しい農民の住居は
竪穴住居であった。
⇒ただし、掘立柱住居という住居が、
西日本から次第に普及していた。
◇寺院などは、礎石を用いた瓦葺建築

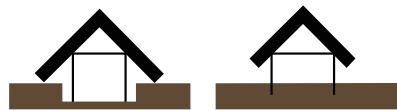


図2 竪穴住居(左)・掘立柱住居(右)

<税負担からの逃避>

下線部⑥は里長によるの税の取り立てである。
→税負担は重く、下線部⑤のように農民は
「飛んで逃げたい」と思うほどであった。
⇒実際に負担から逃げた農民もいた。

①逃げた先の場所では、「(4) _____」者と呼称
②逃げられた場所では、「(5) _____」者と呼称
◇(4)(5)の違いは、呼ぶ側の視点

●田地の借用と利息

農民は、口分田班給後の余剰地乗田を借りること(賃租)ができた。
→ただし、利息として収穫の20%を納入しなくてはならない。
⇒生活が貧しくても、容易には借りられなかった。
◇口分田は租(広さ1段当たり稲2束2把で、収穫の3%に相当)を納入

土地がもっとほしい…



図3 農民と土地

●「浮浪」「逃亡」者の行方

浮浪・逃亡している農民は、寺院・豪族のもとに仕えた。

→寺院・豪族は、農民を養って田地開墾のために使役した。

⇒743年に施行された⁽⁶⁾ _____ に従い、

寺院・豪族は大規模な田地⁽⁷⁾ _____ を形成した。

◇(7) …租が掛かる^{ゆそ}輸租田

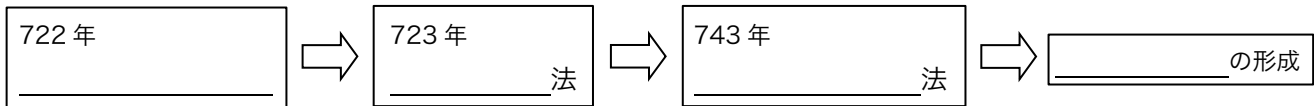


図4 開墾政策と初期荘園

●税負担を避ける別の方法

当初、日本では「受戒（僧になるための儀礼）」なしで僧になれた。

⇒そして、僧になると税を免除された。



読経もできず、勝手に出家を宣言して僧となった^{しどそう}私度僧が続出した。

→「受戒」を義務化したいが、それを執り行える僧が日本にいなかった。

⇒唐から僧を招いたところ、753年、⁽⁸⁾ _____ が渡来して戒律を伝えた。



図5 鑑真

○結婚形態

●憶良の和歌②

かすみ 霞 立つ 天の川原に 君待つと い通うほどに 裳の裾濡れぬ

【現代語訳】

霧が立ちこめる天の川の川原で、牽牛を待って行きつ戻りつしていると、裳の裾が濡れてしまった。

この和歌は、七夕伝説の織女（織姫）が牽牛（彦星）を待つ場面を詠む。



古代の日本の結婚は、夫婦別居で夫が妻の住む家に通う、

あるいは妻の家に同居した。

→上の和歌のように、妻は夫が来るのを家で待つ身だった。

⇒このような古代の結婚形態を⁽⁹⁾ _____ を呼ぶ。



七夕伝説は元々中国発祥の伝説で、内容も日本の七夕伝説と少し異なる。

⇒この異なりは、妻問婚のように結婚形態が違うからだと考えられる。



図6 山上憶良

<中国の七夕伝説>

牽牛（彦星） ↔ 織女（織姫）



<日本の七夕伝説>

牽牛（彦星） ↔ 織女（織姫）